

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

比較文化論：複数の項目にまたがる研究：  
肉体の扱い・処理，と社会構造

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2010-02-26 キーワード: 作成者: 船曳, 建夫 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00003667">https://doi.org/10.15021/00003667</a>

## 肉体の扱い・処理，と社会構造

船 曳 建 夫\*

1. はじめに

2. 三つの分布型

### 1. はじめに

本報告書の、大項目別の比較分布を背景として、以下大項目を横断する形でその相関を検討する小項目は、男子結社(3412)、ミイラ(4106)、頭骨保存(4107)、仮面舞踏(5214)、人形芝居(5306)の5項目である。

筆者がこれら5項目を選んだのは、男子結社と肉体や身体の特異な取扱いに、何らかの相関があるのではないかと考えたことによる。すなわち、男子結社が女子を除外し、かつその継続的な存立をはかろうとするとき、次世代を再生産するための女子がその中にいないがゆえに別の方法を取るに違いない。その一つの方法はたとえば、過去の世代からの連続性をもつ、伝承されたところの、「秘儀的知識」を共有維持することがそれであろう。それと同様に、より直接的にその成員の肉体を何らかの形で保存することがおこなわれるのではないかと。たとえば、小項目中のミイラ、頭骨保存、といったような形で。そしてまた、仮面舞踏や人形芝居も、物と化した肉体(仮面、人形)を用いた表現と考えれば、それらの項目も男子結社と相関を持つかもしれない。これらの発想の裏には、筆者の調査したメラネシアのある1社会(マレクラ島)における、男子結社の中での人形や仮面の使われ方、頭骨保存の慣習、といった観察された事実がある。そこでは、これらの要素は、男子結社の連続性を保証していると考えられる。しかし、男子結社とこれらの要素の間に正の相関がある、というのは仮説とさえいえず粗雑な「見込み」にすぎないが、仮説として成立するかどうかをまずは検討するために、本研究のデータベースを利用しようと考えた。

\* 東京大学教養学部

## 2. 三つの分布型

先述の5項目は、筆者がその大項目別報告を担当したところの、集落・地域組織(3400)、芸術(5200)、そして研究会で報告を行なった、死・葬制(4100)、娯楽(5300)にふくまれている。そしてそれら小項目の分布には、次の三つの型が見出された。

**A型**：台湾とフィリピン北部、また遠くマダガスカルを含んで東南アジア大陸部から、マレー半島を飛び越して、スマトラ・ジャワ―小スンダ列島―ニューギニア―メラネシア―ポリネシア、と円弧のように、また回廊のように連なる分布域（参照、3400：集落・地域組織）。

**X型**：中国南部を中心にもつ様々な大きさの同心円状の分布であり、ある場合にはその分布の境界は東南アジア大陸部にとどまり、またある場合は東南アジア島嶼部におよぶが、オセアニア地域には達しない（参照、5200：芸術）。

**Y型**：東南アジア大陸部の内陸と台湾、フィリピン北部、これを西のひとまとまりとし、東のひとまとまりを、メラネシアを中心としたオセアニア地域とする2つに分かれた分布域（参照、5200：芸術）。

（これらの内、A型については本研究分担者の吉田集而氏から、その意味について示唆があったが、読者には本書中の吉田氏の報告を参照されたい。）

さて、前記の5項目が以上の三つの分布の型のどれを示しているかを表わすと以下のようなになる。

男子結社(3412)	Y
ミイラ(4106)	Y
頭骨保存(4107)	Y
仮面舞踏(5214)	?
人形芝居(5306)	(A)

本研究の中間報告の段階では、男子結社のサンプル数が少ないことが障害となって、上記の主張が考慮に値する仮説足りうるかを十分に検討することはできなかった。しかし、今回は男子結社と他の項目との相関は明確に出ている。まず、男子結社の認められている17民族は、Y型の分布を示している。同様に「ミイラ」、「頭骨保存」、のそれぞれ16部族、43部族も、いくつかの例を除くと、Y型の特徴をもつ分布となっている。ここに見られる分布の類似性は前述の仮説に少なからず意味を与えてくれるように思える。

つぎに残りの2項目はどうであろうか。残念ながらY型を示す結果は出なかった。

舞踏と芝居という表現の形式が、文化の比較的高い水準と係わっていることから、男子結社との関連を探ることはそもそも難しかったのかもしれない。「人形芝居」は、その分布をある型と呼ぶとすれば、中国やあるいはヒンズー文化からの影響と係わりを持つA型であって、そのことはうなずける。しかし、「仮面舞踏」の分布は再考の余地がありそうだ。つまり、分布のなかの大スンダ列島、小スンダ列島諸民族の仮面舞踏と、オセアニアにおけるそれとは、系統を異にしているものと考え、後者をわれわれが考察しているところの男子結社と文化複合を成すもの、ととらえれば、「ミイラ」や「頭骨保存」と同様に、「仮面舞踏」も男子結社のある部族の身体観を示す要素とみなすことができる。

以上のことから、筆者は、当初の見込みは、検討するに足る仮説になったのではないかと考える。そしてここから次の2点が展開の方向としてみえてくる。一つは、上記の相関が見られる部族の、観念に関するデータからこの仮説を検討することである。もう一つは、たとえば、勲功祭宴(4211)、といった項目を入れてさらに文化複合を見出そうとすることである。その場合、本研究の項目中には直接見出すことはできないが、その祭宴中に使われる偶像、仮面について調べることも興味深い。そして、本研究の資料のなかでも、足を組んだ座像(5215)や蹲踞人像(5216)、といった項目は、「仮面舞踏」同様に、高文明からの影響によるものとそれ以外を分けることで、男子結社、勲功祭宴と何らかの関係を見出せるかもしれない。